
自然のお怒りになる頃にシリーズ第四弾！ニシキソウのなびく頃に

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自然のお怒りになる頃にシリーズ第四弾！ニシキソウのなびく頃に

【Nコード】

N9080P

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

第四弾、来る。まだ見ぬ惨劇は、魔女と自然を和解へと導くのか
納っ関係の後ろで何かが起こる。

エラー?01 第一話 黄金の魔女と自然の魔術師降臨!分かったぜ!

1989年の六軒島からやってきた人物。

トウダイグサ・E・アルキリア、ユーフォルビア・ベアトリーチェは、次なる世界を見つけた。

1999年7月30日午前11時。

「全く、世紀末だからみんな慌てているな。」

大河内藍輔。18歳。

「しょうがねえよ。大河内は、俺より馬鹿だからな。」

柿山富久摺。19歳。

「よくも言ったな。」

「お前は、先輩である俺に攻撃できまい。」

「きみたちは、また喧嘩しているのかね。きちんとした大人になれるのかね。」

柿山禪十。51歳。

「そろそろ行きましょうか。お父様。」

柿山能富子。48歳。

此の世界には、これからとんでもない結末を迎えることは、知らないでいる者たちであふれていた。

エラー！?01 第一話 黄金の魔女と自然の魔術師降臨！分かったぜ！（後書き

次回 エラー！?01 第二話 物語の始まり。お楽しみに

エラー? 01

第二話 物語の始まり (前書き)

ホテルで起きる大量殺人の幕が上がる。

大河内は、室戸と一緒に客室の予約を入れた。

柿山家もそのあとに入ってきた。

20名のお客がいた。

6名の支配人は、とくに柿山家のほうを循環していた。

「お父さん、なんで柿山家のほうにみんなは行くの？」

市埜蒲礼香は、父親である市埜蒲和璃に言った。

「それはね、礼香ちゃん。柿山家は、大金持ちの人たちだからだよ。」

」

「そうなの。」

大河内は、柿山冬林に出会った。

「あつ、兄さんに馬鹿にされている奴だ。」

「誰が、馬鹿にされているだと。お前は、富久摺の弟たる！」

「ああ、そうだよ。」

雨が突然激しく降ってきた。

「大変だ。」

「どうした麻素深？」

「土砂崩れで、ホテルの出入り口がふさがった。」

「何だって、報告しなければならないな。」

小此木は、ホテルにいる人達にお知らせをした。

「困ったな、土砂災害だとはな。」

枕崎は、そう言った。

朶下は、いやなことを思っていた。

「このホテルは、陸の孤島になった。しばらく誰も助けに来ない。つまり殺人事件が起きたとしても。」

北上は、朶下に言った。

「物騒なことを言わないでください。朶下さん！」

「すまない、すまない。自然学者だから余計な口出しはしないことにするよ。」

7月30日 午後11時50分

「キャー！」

佐怒賀は、叫んだ。

「どうしたんだ。なっ・・・」

大河内が見たのは、8人の死体。

「みんな、心臓射抜かれている。」

死亡したのは、辻納江、杉嶋、枕崎、東長、須磨寺、阿久根、柿山田名栖、柿山米美宇須である。

富久摺は、大河内に言った。

「おかしいんじゃないか？支配人まで殺されているというのは。」

「しかも、お前の一族の二人が殺されているんだぞ。」

「二人じゃない。弁護士もいる。」

「お父さんが、死んだ。」

圭蔵は、そう言った。

「わかったぜ！犯人は、柿山家の膨大な財産を狙っている奴だ。ちなみに俺は、そんな財産には興味はない。」

「確かに、俺がお前にセレブな皿をプレゼントしようとしたとき、断ったもんな。」

富久摺が嫌味を放つかのように言った。

エラー？01

第二話 物語の始まり（後書き）

次回 エラー？01

第三話

残りと余り。お楽しみに。

エラー? 01 第三話 残りと余り (前書き)

生き残った者たちの悲しき物語は、さらなる惨劇の招待へと誘われる。

エラー？01 第三話 残りと余り

生き残り人数、18人。

大河内は、室戸の部屋にいた。

「ねえ、どうしたの落ち込んだ顔をして、世紀末なのは分かるけどさ。」

「人が8人も死んだ。」

「えっ、どういうことよ。それって？」

「このホテル自体が巨大な密室であることに気がつかないのか？室戸ちゃん。」

「確かにそうね。」

朶下は、この殺人事件は、推理する気はない。

「この状況は、自然現象ではありません。」

市埜蒲の親子は、殺人事件が起こったホテルである雛神楽から出たかったが土砂がドアを固く閉ざしてしまっていた。

ドアには、赤黒い血で描かれた謎の数字があった。

「199920120846？なんだこの数字は。」

礼香は、少し体が震えた。

「お母さん、この数字怖いよ。」

「礼香ちゃんの言う通りよ。あなた、帰りま・・・嫌ー！」

市埜蒲和璃は、左顔がはがれていた。

礼香は泣き出した。

「お父さんが・・・お父さんが・・・」

此の惨劇は、ほかの所でも起きていた。

小此木、北上、柿山圭蔵、柿山真理櫛、柿山能富子、三野、麻素深が同じように顔をはがされて死亡していた。

礼香は、泣きながら飛び出した。

「ちょっと、礼香！」

そのあと、市埜蒲美輪子は、顔を半分はがされた。

生き残り人数、9人。

エラー？01 第三話 残りと余り（後書き）

次回 エラー？01 第四話 浮いた戦慄。お楽しみに！

エラー? 01 第四話 浮いた戦慄(前書き)

とうとう、犯人捜しが始まり、次なる惨劇が起きてしまった。

エラー? 01 第四話 浮いた戦慄

礼香は、生き残っている8人の所にやってきた。

「礼香ちゃん、お父さんとお母さんは・・・」

「お顔を剥がれて死んじゃった。ぐすん」

礼香は、それを言った後、再び泣き出した。

大河内、柿山富久摺、柿山冬林、柿山禪十、柿山江利奈、柿山佐怒賀、室戸、朶下、市埜蒲礼香の9人だけとなった。

「さあーて、誰が犯人なのかしら。」

江利奈は、突然語り始めた。

「ちょっと、待ってよ。いま、犯人探ししている場合ではなく、救助されることを待つほうが先だろ！」

大河内が怒りながら言った。

「だって、犯人がいたら私達、救助される前に殺されているわ。」

「だとしても、犯行がばれて逮捕になるんじゃないのか。」

「この中でアリバイがなさそうなのは、柿山家以外の者たちね。」

朶下は、激怒した。

「柿山家自身にもアリバイはある。俺達は、みんなアリバイがあるんだ！それに室戸さんと大河内さんは、一緒に部屋にいたというからアリバイがある。俺は、自分の部屋で煙草を一服していた。俺にだって完全なアリバイもある。だから勝手に犯人扱いするのは、おかしいんだよ。そういう江利奈さんは、どうなんだ。」

「私は、少しでも廊下を散歩していたわ。此の雛神楽というホテルは、結構歩きやすいのよ。私にはアリバイがある？」

江利奈は、少しでも咳払いをして言いなおした。

「だから、私にもアリバイがあるのよ！」

礼香と大河内と室戸と富久摺と佐怒賀と朶下は、屋上にいた。

「ここで救助待つにしても、お父さん達遅いわ。」

「それに俺の弟も来るのが遅いぞ。」

富久摺は、不安に思い下に降りた5人も一緒に降りた。

ゲストルームを見た大河内達は、後ろに向いた。

「お父さん、お母さん！」

「おいっ、弟！しっかりしてくれ！」

三人は、目を抉り取られた後、胸に杭を打たれて死亡していた。

エラー！? 01 第四話 浮いた戦慄（後書き）

次回 エラー！? 01 第五話 次の静寂。お楽しみに

エラー？01 第五話 次の静寂

大河内と室戸と富久摺と佐怒賀と朶下と礼香は、別の部屋で困惑していた。

「くそ、このまま死にたくない。」

「富久摺、俺だって同じ気持ちだよ。でもこれでは解決のしようがない。」

佐怒賀と朶下は、隣の部屋にすることにした。

「朶下さん。」

「私は、あなたを守ります。」

「ありがとう朶下さん。」

二人が抱き合った瞬間、一つの矢が彼と彼女の体を貫いた。

「佐怒賀さん。ごめん・・・」

「一緒に、死ぬのもいいことね。」

朶下と佐怒賀は、横に倒れた。

大河内と室戸と富久摺と礼香は、朶下と佐怒賀が来ないことを不審に思いその部屋に入った。

「佐怒賀さん。」

富久摺は、佐怒賀と朶下の所に駆け寄った。

富久摺が突然倒れた。

「富久摺？」

富久すりの腹から臓器がはみ出していた。

「怖いよー！ヒエヒエーン！」

あまりのショッキングさに礼香は、大河内の所に隠れた。

室戸と大河内と礼香で必死に逃げることにした。

しかし、室戸と礼香に矢が刺さった。

「早く逃げて・・・大河内君。」

「分かった。すまん室戸ちゃん。」

大河内は、逃げまくった。

屋上に出た瞬間、黄金の森林に出た。

「ここは、どこなんだ？」

「自然とは、素晴らしきこと。自然は何かも否定しない。自然の真実、4人を刺した矢は、使徒の部下が投げたものであり、人間に

犯人側はいない。」

大河内は叫んだ。

「一体誰だ。」

「17の感情の罪をコントロールできない人の子よ。」

トウダイグサ二株が、自然の使徒になった。

「ウェルカム大河内。」

「なんだ、お前等は。」

「自然の使徒だよ。君は奇遇にも救われているようだけど、いい気になっているのもここでおしまい。ここから先は、トウダイグサ・E・アルキリアとユーフォルビア・ベアトリーチェによる晩餐のパーティーだ。ダイナソーブラッドの用意と食事の用意を部下達やってくれたまえ。」

「了解しました。主様。」

エラー！? 01 第五話 次の静寂（後書き）

次回 エラー！? 01 第六話 晚餐の快樂。お楽しみに！

エラー？01 第六話 晩餐の快楽

「貴様ら、何がしたいんだ！」

大河内は、トウダイグサに言った。

「自然の使徒は、みんな人間を恨んでいるのだ。なぜならば怒りを鎮めていたのいいことだがその代償として心が病んでしまったのだ！」

「要するに、ヤンデレということよ。」

「何が、ヤンデレだ。これでは自然にだって殺人行為の罪があるということになるぞ！」

「自然の真実、自然は殺人を犯すが罪にはならない。」

「最後に残った大河内にはボーナスとして切断&腸抉り出しという方法をして挙げよう。」

「自然の使徒である吾らに跪け！そうすれば命だけは助けてやる。」

大河内は、自分の命を大切にしたいのだが、自然の使徒に殺されたみんなを思い断ることとした。

「お前等に殺されたみんなを俺は助けにいくお前等の殺意を壊してやる。」

「それはつまり、自分の命は護らないという確信でいいということ

ですね。」

「なに、馬鹿なことを言うよ。自分の命も大切だがみんなが心配しているんだ。」

「どうやら、人間と自然の関係は今宵冷めてしまったようだな。そんなに君が死にたいと決意しているのなら、俺がお前を殺してあげるよ。自然の魔法でね。許してくれこういう運命にあったのだと。抗うことができない運命にあったと。さあ、死んでくれ我々は、冷めきった関係にうんざりなんだ。いいかい、地獄はもっと冷えた場所だよ。アピスで償って自然に謝罪できる人間として生まれ変わらな。」

「そんなはずじゃなかったのに・・・グハッ！」

大河内の腹と胸に槍が刺さっていた。

「それじゃ、大河内を切断しましょうトウダイグサさん。」

「そうだな。ユーフォル。」

大河内の体が次々と切断されていった。

そのあと、二人はダイナソーブラッドと先ほど殺しまくった人間の肉を食べていた。

エラー！01 第六話 晩餐の快樂（後書き）

次回 エラー！02 第一話 残酷囁く、雛神楽の音。お楽しみに！

エラー?02 第一話 残酷囁く、雛神楽の音

阿久根と須磨寺は、ある会話をしていた。

「今日も、きしむ音がしましたね。」

「ちょっと古いのもあるから、心配になるな。突然床が落ちたら大変だし。」

「確かにそうですね。」

1998年12月25日の夜であった。

トウダイグサとユーフォルビアが、外を見ながら紅茶を飲んでいた。

麻素深が此の二人と会話をしていた。

「9、4、6、2、1、3、1、という感じでいいでしょうか。」

「裏切りの覚悟で、そう言っています。」

麻素深は、何かを企んでいた。

1999年7月30日……

大河内達がやってきた。

ホテル内は、ワイワイと盛り上がっていた。

しかし、残酷囁く床が九人を待っていた。

エラー！02 第一話 残酷囁く、雛神楽の音（後書き）

次回 ? 02 第二話救われぬ命の罰。お楽しみに！
今回から少しだけ流れが変わっていきます。

エラー? 02 第二話 救われぬ命の罰

午後6時45分、大雨による土砂崩れが発生した。

稚内は、困った表情をしていた。

そこに柿山の次期当主が言った。

「大丈夫だ。救助が来るまでに無事であれば。」

「そうですね。」

大河内達は、不安な空気だが夕食を食べていた。

午後9時50分、大雨は止んだ。

ニシキソウ達が姿を現した。

「寒冷低気圧殿、この内容でいいんですね。」

「はい、じっくりと罪人を懲らしめなさい。」

「了解。」

ホテルのないで軋む音を出す場所に穴を付けた。

ユーフォルビアは、トウダイグサに言った。

「9人の罪を抗い苦しめる。」

9人、小此木、阿久根、須磨寺、東長、礼香、圭蔵、田名栖、真理
櫛、水俣が誘われるようにやってきた。

その穴には、動物の苦しみを入れていた。

9人は、穴に気がつかず落ちてしまった。

9人は目を覚ますとそこは幻想空間のようであった。

「気がついたか、痛みを喜びにした人間。」

「誰だ!」

「我々は自然の使徒。」

「自然の使徒?」

「そうです。皆の者この9人を殺れ!」

「何で・・・」

「二人は、崖から落とされて死んだイノシシ。」

「二人は、犬の目に木の枝で抉った罰として。」

「二人は、猫の体を車でひき殺した罰。」

「二人は、生き物をなんとも思わずに殺していく罰。」

「一人は、猫に餌を与えずに殺した罰。」

「二人は、ネズミを5匹、海へ放り投げて荒波の藻屑と化したネズミの体になるような罰。」

「一人は、真実によって裁かれた捨て犬の罰として。」

「二人は、ハムスターを踏みつけて殺した罰として。」

「この九人の人間は、もはや下等生物ではない。墮落生物です。墮落したものは殺すのみですやりなさい。」

「自然の使徒の恐怖を知れ。」

9人は、言われたように殺されていた。

残酷な運命をたどり命を粗末にすることを許さない使徒たちは、最後に彼等の顔面を形が無くなるまで踏み荒らした。

「さようなら、墮落生物の諸君。」

7月31日の午前6時。みんなは、生きる氣力を失うほどの衝撃を得た。

「何だよこれは？」

「礼香ちゃん、どうしてだれが礼香ちゃんを殺したのよ!」

「おばさん、落ち着いてください。」

「ジジイまで死にやがっている。」

エラー！? 02 第二話 救われぬ命の罰（後書き）

次回 エラー！? 02 第三話 4人の証言。お楽しみに。

エラー? 02 第三話 4人の証言

午前8時、雛神楽全体から厳しい空気が溢れていた。

小此木は、崖から落とされたイノシシのように軋んだ体から背骨が露出していた。

阿久根は、犬の目を枝で抉ったように、目を抉り取られた後、頸動脈をバツサリと切られていた。

須磨寺は、車に轢かれた猫のように、ぐちゃぐちゃになっていた。

田名栖と水俣は、動物を無造作に殺した罰が重く、体をバラバラにされていた。

それ以外は、身元が分からないほど体が粉々になっていた。

「殺した犯人が、此処をうろついている可能性があるでしょ。」

「みんなを取り調べるなんて不可能ですよ。」

9人死亡は、かなりまずい空気をもたらしていた。生き残った19名は、少しおびえていた。

「しかし犯人が誰だか分からなんじゃ俺達の身が危ない。」

「確かにな。」

大河内は、この謎を解こうと考えていた。

「室戸ちゃん。俺と一緒にいてくれないか。」

「殺人事件が起きた以上、一緒にいなきゃね。殺される前に。」

辻納江と稚内と枕崎が、能富子に呼ばれた。

彼等は、2階のステージにいた。

「貴方達が犯人だと分かっているのです。」

「勝手に決め付けないでくれ。」

「そうだ！以外の人物かもしれないぞ。」

「そうだとっても此処からは出させない。出ようとしたら銃で撃つわよ！」

「籠城するってことか。」

一方、15人は解散していた。

自然の使徒たちは、次の計画を立てていた。

次は、15人から6人を削る。

「ふふ、これって4人を無視するってことですね。」

「自ら密室を作った過ちを後で払わせる。」

「次は、市埜蒲夫妻、朶下、柿山米美宇須、柿山禪十、柿山江成奈
ですね。」

エラー！? 02 第三話 4人の証言（後書き）

次回 エラー！? 02 第四話 姿なしの犯人に問う。お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9080p/>

自然のお怒りになる頃にシリーズ第四弾！ニシキソウのなびく頃に

2011年11月5日18時14分発行